

このキャストに注目!

Mark Steven Doss

マーク・S・ドス (ジェルモン役)

特別インタビュー

インタビュアー岸 錠純(オペラ研究家)

佐渡オペラの楽しみの一つは、

サトロボリタン・オペラ、ウイーン国立歌劇場など

世界の第一線で活躍する実力派歌手に出会えること。

今回皆へお現したジェルモン役のマーク・S・ドス氏も、世界の主要歌劇場に出演を重ねる、素晴らしいアーティストです。

今回記者会見での来日時、ドス氏のインタビューを敢行!

これまでのキャリアについて、オペラへの想い、

役柄について伺いました。

歌の面でもエキサイティングな人物像であることは間違いないですね。



抜群の声量と恵まれた容姿、磨き上げた演技力を武器に、ステージで圧倒的な存在感を放つマーク・S・ドス。米国クリーヴランド生まれのバス・アリオントであり、ミラノ・スカラ座やウイーン国立歌劇場など欧州での活躍も豊富。『椿姫』の父役や『ジェルモン』を演じたといふ。

「椿姫」をしきり重ねた上で舞台に立ちたい、いつもそう思っています。オペラにも出演する喜びは「いろいろな才能を持つ人々と、時間をかけて、一緒に作業できることに恩하겠습니다。その中で揉まれていると、自分もまた普段以上の力を発揮できると実感しています。だから、兵庫県立芸術文化センターの『椿姫』に出演できることも、とても嬉しい思っています。佐渡さんとはこれまで毎日この仕事をになります。イタリアのトリノ歌劇場で『カルメン』と『ビーターグライムズ』をご一緒した時から、マエストロの指揮ぶりにはいつもの自然な共感を感じています。(『椿姫』)でも良い成果を出せるよう、頑々いたいと思っています」

ヴェルディのオペラでは、『アイーダ』のアモナジロウや『ナブッコ』の主人公といった猛々しい役が多かったドス。『椿姫』の父ジェルモンのキャラクターについてはどのように感じているのだろう?

「この役は、実は今朝が初めてなんですよ。第2幕の名アリア(『プロヴァンスの海と陸』)はコマセでたべたひ歌ですが、役として演じるのはこれが初めて。今は歌の練習を積んでいる最中ですが、ジェルモンのパートには退屈するところ全くありません。音楽には美しいセンテンタルな響きがたくさんありますし、後の心にも共鳴できる点が多いです」

ここから、ドス氏が見えてきた、父ジェルモン

の胸について。

『椿姫』はパリのお話ですが、ヴェルディの音楽にはイタリア人の家族の在り方が強く滲んでいますね…私はイタリアのヴェルディ音楽コンクールで優勝してオペラ界に本格的にデビューしたのですが、そのご縁で、名テノールのカルロ・ベルゴンツィ先生にも師事することが出来ました。だから、先生のおおらかによく飛べ、イタリア人が家族を大切にし、伝統的な価値観のもとで鮮を守ろうとする姿を目の当たりにしてきました。ジェルモンは頭脳の父親ですが、実は私の父も大変厳格な人間でして、「家族内の規律は非常に大事、そこから外れることは認めない」という姿勢を崩さずにいました。そして、私自身もどうやら父の教育を受け継いでいるようなので、ジェルモンが「息子と高級娼婦の仲を許さない」這種にならないものも理解できます。ただ、一点だけ、彼が「オレッサ」と初めて対面した折に、うわべの華やかさとは違う彼女の内面、ほんものの真の在り様を見抜くことが出来なかつたのかな。その点だけは隠に思つたりしますね」

続いて、『椿姫』の音楽的な特徴についてもコメント。

「自分の出発点はペルカント・オペラです。駆け出していく頃、あのジョン・サザーランドさんとドニゼッティの『アンナ・ボレーラ』で共演しましたが、サザーランドさんが私の歌声を初めて聴いた途端、「ううん?」と止め息を漏らしたんですよ。どうしたんだろうかと心配にならなかったら、周囲があの消息は便りが出した合意点の証!と言ってくれて、それはほんとした覚えがあります(笑)。その後、声の成熟に合わせて役柄を増やす中で、ワーグナーの『さまよえるオランダ人』やロード

ラウスの『サロ』の目カーナーもよく歌うようになりましたが、『オランダ人』の音楽にはイタリア的の部分も多いですね…『椿姫』ではヒロインのヴィオレッタは勿論、ジェルモンのパートもベルカンтоのテクニックをたびたび要求されます。ヴィオレッタとの長大な二重唱では、歌い回しに感情を醸し、溶ませる技も必要になってきます。ジェルモンは一種の敵役ですが、歌の面でもエキサイティングな人物像であることは間違いないですね」

欧米各地を飛び回る日々の一例で、プライヴェートでは家族との時間を大切にするドス。時間があれば、二人の息子さんと一緒にテニスや卓球を楽しむのだとう。このインタビューが始まる前も、『椿姫』東京公演を見るものをバッグから取り出して見せてくれた。

「少年時代からスポーツが大好きででしたのが、もう一つ好きなのがあって、それが『将棋』なんです。昔から団体生活への憧れが強くて、軍学校か神学校に進みたいと思った時期が長くなりました。でも、結局は大学で社会学を勉強する傍ら、歌を学んで今に至っています。しかししながら、最初にお話したように、オペラ歌手の仕事も(他人との競争が)あり团体も大に人気を求めるものですね。それが性に合っているのでしょうか。日本は今カラ座の東京公演で初めて訪れたましたが、歩いていて人とぶつからないことにまず驚きました。南米なんかから飛び跳ねるから(笑)。そういう点、日本の落ち着いた良さを、今回の『椿姫』の現場でも実感できればと願っています」

マーク・S・ドス(1970年)
アメリカ・テキサス州出身。ミシシッピ州、ウェイン郡立劇場にてアーリー・キャリアをスタート。1996年、ミシシッピ州立劇場にて『アントニオ』でデビュー。2000年、ミラノ・スカラ座にて『アントニオ』で初演。2002年、『アントニオ』でローマ・オペラ祭開幕。2004年、『アントニオ』でローマ・オペラ祭閉幕。



舞台映えする188cmの長身



腹の友は携帯卓球セット!